

都道府県別賞一等

家族の歴史をつなぐ生命保険

長野県 佐久長聖中学校 三学年

西澤 明志

「もう十八年か、あつという間だね。」

先日、両親が話していた。感慨深げで安堵したような、嬉しそうな表情で。十八歳、高校三年生の僕の姉のことかな。話を聞いてみると、姉の生後間もなく加入したこども保険が満期となり、保険金をいただけるとのことだった。今、姉は希望する進路に向かって、大学受験勉強を頑張っている。受験から大学入学まで平均二百万円以上もかかるらしいが、こども保険のおかげで大学に行かせてやれる。両親の表情の理由が分かった。姉が生まれた時には、はるか先だと思っていた十八年後。健康にこの日を迎えられて感謝だそうだ。それに加え「かけておいて本当に良かった。」と。

だが貯蓄と何が違うのだろうか。両親は生命保険が趣味のようにも見える。満期額は受け取れるものの、健康だったおかげで、万一の時の入院給付も払込免除も受けることはなかった。でも保障の見直しをくり返しながら、こども保険の他にも入院、死亡、貯蓄型、これでもかとあらゆる生命保険に加入しており、掛け金もかなりのものだ。幸いにも家族で長期の入院もなく生きている。それなのに生命保険にこだわるのはなぜか。

一言で言う「大事な家族を守る御守」だそうだ。貯蓄も兼ねて、万一の場合を過剰に心配せずに生活できる御守だと。人間何があるか分からない。万一の時に残された家族が悲しみの中、生活や子の将来の不安まで抱えることになるのは耐えられない。両親にとって宝である僕と姉の将来のために大切な備えが生命保険なのだと言っていた。生命保険が趣味かと思わせる程なのは、両親のこれまでの経験からきていることも知った。

父は中学二年で父を亡くしている。会社を退職し、起業して数年で借金も残っている中で、三兄弟のわが子たちの将来を案じて祖母は途方に暮れたらしい。だが、生命保険があったおかげで、三人とも大学を卒業し、希望する職業に就くことができた。僕の両親が結婚した時、生命保険に助けられた祖母から母は「たいちゃん、お願いね。」と父の保険証券を託されたと言っていた。両親は生活費と生命保険の払込とのやりくりを上手にして、新たな家族を守っていくと決意したそうだ。

母も若くして両親を亡くしている。親の死に直面し、高額な医療費請求も届く。恐怖と不安に押しつぶされそうだったし、悲しみは癒えないが、国の高額

第61回中学生作文コンクール

療養費制度と生命保険に助けられ、乗り越えられたそう。母の成人祝に親が契約してくれた積立保険は、親の死後、母が御守として二十年払込を続けてきた。僕と姉が高校と大学に進学する頃、満期となるらしい。「ママの親が昔かけてくれた保険が明志たちの進路を助けてくれる。」と涙ぐんでいる。だから「生命保険」なのか。

僕の生後は、低解約返戻金型保険に加入してくれたらしい。十五年で払込終了後は、解約しても払い込んだ額を受け取れて、そのままにしておくとも額が増えていく貯蓄と保障を兼ねた保険だそう。保険ってすごいな。

「生命保険のおかげで乗り越えられた。」「かけた額よりも受け取る額の方が少なかったら、健康に生きてこられたということ。一番の幸せで感謝。」「家族のために万一に備えて。」両親のこれらの言葉は、早くに親を亡くし、悲しみの中でも希望を失わずに道が開けた経験からくるものなのだと納得した。

話を聞いて、保険の一つ一つに祖父母の代からの我が家の歴史があるのだなあと考えた。祖父母から両親へ、そして僕と姉へ受け継がれてきた「子への愛情」。「保険証券」に込められた親の愛は温かく力強い。僕はバスケットボールに打ち込んでいるが、両親は全力で応援し「今の僕」を支え、生命保険を「趣味」にして「将来の僕」まで支えてくれていて。僕が頑張りさえすれば、希望の道が開ける。感謝の気持ちを忘れず練習しよう。勉強も少し心を入れ替えて両立しよう。今、僕ができることを。